

# 性的少数者 親の思い1冊に

性的少数者の子を持つ11人の親の思いをつづった手記が完成した。我が子の悩みや苦しみに向き合った親の言葉からは、学校現場の対応の遅れが浮かぶ。

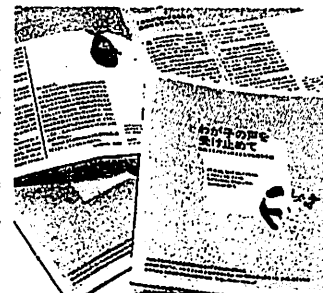
まとめたのは、性的少数者の心の健康などについて研究を続けてきた日高庸晴・宝塚大看護学部教授（社会学）。

手記を書いた一人、40代の母親は、高校2年の我が子から手紙で、女として生まれたが心は男だと告げられた。「今まで子どもも知らず傷つけるようなことをずいぶん言ってしまったと、自分を責めました」。修学旅行や水泳を休もうとするなど、気づく機会があったことから、「教師も親も知識を得られる機会を設けて欲しい」と訴えた。同性愛者の子を持つ50代の母親も「子どもが自殺まで考えていたと分かる先生は多分いない」と、「悩み相談の件数が少ないのではなく、声が上がらないのです」と対応を求めた。教師から「男か女かわけのわからないものは登校の必要はない」と言われた事例もあり

## 教師も知識得る場を ■ 声上げられない

た。男か女のいずれかと自認していないXジェンダーの子を持つ50代の親は「教員養成課程で正しい知識を身につけることを必修にしなければ、教師の言葉に傷つゝ子はなくせない」と指摘した。

日高氏が2011〜13年に教師約6千人を対象に実施した調査では、6割超が同性愛や性同一性障害について教える必要を感じながら、授業で取り上げたことがあるのは14%だった。日高氏は「思春期に最も多くの時間を過ごす学校で、性的指向を含む多様性について正しい知識と肯定的メッセージを受け取れる仕組みづくりが必要」と話す。  
<http://www.health-iss ue.jp/p/na/nanron-roozu.htm>  
（二階堂友紀）



日高庸晴教授がまとめた親の手記＝日高氏提供